

# 大陸（中支）

## 北支から中支へ転戦

福井県 山田 廣

昭和十五年七月一日「北支派遣軍に転属を命ず」。吉田、宮川両君も一緒だ。歓呼の声に送られて勇躍、鯖江歩兵第三十六連隊を後にした。老いた母は鯖江駅まで見送りにきた。「大君に召されたる」（出征兵十を送る歌）の大合唱のなかで母は健気にも涙は見せまいとしている風だった。万歳！万歳！の歓呼の嵐のなか汽車は静かにホームを滑り出した。隣の吉村伍長の母親は突然ふわりと後ろに倒れかかった。すぐ群衆に支えられるが、もう何も見えないようだった。

七月二十四日、貨物船に乗り宇品港を出港。船はきれいな瀬戸内海の島々の間を静かに進む。皆甲板に出ていつまでも去り行く日本を食い入るように眺めていたが、とうとう何も見えない大海へと出て行った。四日後、船はきれいな黒潮の青い海から黄色い海へと、はっきりした境界線を越えて進む。黄海に入ったのである。翌夕、船は停まった。黄色い海はさらに泥色に濃くなっていた。

陸地は全然見えないが、ここが塘沽港だそうだ。翌朝小さなハシケが迎えにきた。繩梯子を伝い乗り移る。三十分ぐらいして泥くさい塘沽港に上陸する。初めて見る中国の陸地だ。黒いすらりとした豚が犬のように走り回っていた。天津から貨物列車に乗る。行き先は太原らしい。実に暑い。生水を飲んでほとんど全員下

痢。食欲なし。何も食わずにぐったり横になっていた。鯖江連隊で一年八カ月の猛訓練を受けた最強の精銳も形無しである。

石家荘で誰かの知人よりビールを差し入れあり。

「この世のおさめに呑め」とアルミカップで回し飲み。

一口のビール。チュンと胃の腑にしみ渡る。このビールが利いたのか皆元氣を取り戻し、八月一日、山西省

大原北站、独立混成第九旅団司令部に無事到着した。数日後、現地実戦教育のための大孟鎮の山崎隊長の指揮下に入った。山崎大尉は共産八路军軍に対する山嶽

戦では右に出る者なく敵からも恐れられているのとこのどだった。翌朝出発、最前線の南温川に向かった。切り立った黄土台地の崖の間の河床道路を進む。水は全く無い河である。木や草一本も生えていない。時々

敵が崖の上から撃ってくるそうだ。重い完全軍装に肩も腰も腫れ上がりながら約四〇キロの行軍である。

夏の太陽が木一本も生えていない黄土大地の崖山に沈むころ、やっと南温川に到着したが、途中一軒の家もなかった。泥煉瓦を積み上げた家と崖腹の黄土を横

からくり抜いて造った原始的な横穴式住居が十五、六戸の部落である。温泉どころか井戸も電気もない。

泥煉瓦を積み上げて造ったトーチカが一つあり二十人ほどの日本兵が守っている最前線の基地である。ここを拠点として約一カ月の特訓が始まった。見渡す限りの黄土大地を放牧の羊の群れが移動して行く。

隊長が牧童ならぬ老夫に「八路军がいなかったか？」と尋ねた。指さして向こうの台地の先にいるという。

しばらく行くとパンパン！ ビュン！ カーン！ と撃ってきた。一瞬地に伏した。初めての敵弾の洗礼である。皆の顔は異様に蒼白だ。「ぶるっ」と武者震いを押さえて敵に向かって走った。無限に続くと思える黄土大地は五〇〇メートルぐらい進むと崖崩れの断崖の谷にさえぎられ、敵はその断崖を滑り降りて逃げてしまった。黄土大地の地平線に沈む夕日の光景はまさに雄大である。

毎日、乾ズイキの粉味噌汁。給与は実に悪かったが、その特訓も終わり私は山崎隊配属となり、大孟鎮中隊本部に勤めた。この山崎中隊は前述の如く対八路戦を

得意として常に何倍もの敵に対し猪突猛進突入し戦果を挙げた。反面中国人の民心把握の隊は一兵に至るまで徹底していた。中国人の家にもよく遊びに行った。部屋の土壁の凹部に仏を祀り礼拝していた。日本も仏を拝むと言うと「同じ」と言う。そして貴方たちは日本で食えないのかと聞く。中国では「良民不当兵」と言って食えない者しか兵隊にならないと。また五億の漢民族は五千年の歴史と文化があり、過去何十回と他民族に侵攻、支配されてきたが結局生き残ってきたと誇らしく語った。

昭和十五年十二月、太原の大隊本部で初年兵の教育を担当した。毎日晴天、雨は一滴も降らない。零下三〇度の日もある。ときたま乾燥した粉雪が吹雪いても凹部に吹き溜まる。福井の雪と違い握っても玉にならない。手を開くとメリケン粉のように散ってしまう。

#### 大孟鎮東方山の戦闘

昭和十六年三月十五日夜一時ごろ、「八路軍五百」老百姓が報告に駆けつけた。すぐ「出動!」。検閲終了の初年兵も初出陣である。急ぐこと一時間ぐらい、

山の登り口で敵の側衛らしき警戒部隊が横に散開して待ち伏せしていたのである。

「撃て!」、敵指揮官の号令がハッキリ聞こえた瞬間全員地に伏した。パンパンパン、カンカン、耳をつんざく至近距離の一斉射撃! 距離五〇メートル。約五十の銃口が一斉に我が方に向かって火を噴いた。大きな花火のような銃口炸裂、火災の横断幕! 明るく凄い! 着剣! 手榴弾二発を敵に投げつけた。ガンガン地響き立てて炸裂! 突撃! 中央突破突入した。敵の逃げ足は実に速い。遮二無二突進! 前から横から撃ちながら敵は逃げる、構わず突撃! 一〇〇メートルぐらい追い上げたとき、右横から敵のチェコ軽機が火を噴いた。私以下三人が一瞬、叩き付けられたようにもんどり打って倒れた。初年兵の牛島一等兵が「足をやられた!」と叫んだ。「頑張るんだ」と励まし、助けに行こうとしたが足が全然言うことをきかない。太い棒で叩かれたように感じたが私は弾が当たったとは思わなかった。ズボンに血がにじんできてはじめて負傷したと気付いた。

ズボンの上から縛り、しばらくして衛生兵が来て傷の手当てをしてくれた。敵は逃げてしまった。一時間ほどして皆戻ってきた。

あたりが少し明るくなってきたので、二人の兵の肩に掴まりながら痺れて感覚のない片足を引きずって下山した。すぐく眠くなってきて寝てしまい、目が覚めた時にはもう太原野戦病院に着いていた。五時間ぐらい寝たことになる。右大腿部貫通銃創、大腿骨、動脈、太い神経も外れている。軍医が「実に幸運な当たり方だ」と感心していた。六月退院、大孟鎮に復帰した。

#### 東光水鎮警備隊の救援

「東光水鎮警備隊長山岸軍曹出撃して敵の包囲攻撃に遭い苦戦中」、一人の兵がトーチカに走り帰り、電話してきた。飛鷹曹長以下十人が支那馬を飛ばして急行したが敵は逃げてしまった。山岸軍曹は負傷した兵を背負いながら後退中、顔と腹に敵弾を受けて倒れ虫の息だった。「山岸、山岸」と呼んだが何の返答も反応もない。一時間後息絶えた。鯖江と一緒に訓練を受け一緒に山崎隊に來た親友を眼の前で亡くし涙が止ま

らなかった。

警備隊は大半を失い、私はそのまま、東光水鎮の警備隊長になった。まず陣地補強工事、土壁の修理には部落民が協力してくれた。

この部落の十日に一度の市は賑やかだった。肉や野菜も買入れた。皆愛想がいい。「オー隊長」と挨拶する。部落民に信頼される警備隊になりたいと思った。隣のおばさんが油で揚げたての粟餅を持ってきてくれた。柔らかくて実にうまかった。また隣近所集まっとうどん作りをして会食をした。慰問袋が届くと近所の部落民にも分けてやった。遠いところから病氣や傷の手当てを頼みにきた。少々の腹痛なら歯磨き粉で治った。クレオソート、ヨードチンキすべて良く効いた。

夕方ともなると一番星を眺め、誰かが屋根の上に出て歌い出すと皆出てきて合唱した。

四キロぐらい離れた丘の上に立派なキリスト教の教会があった。ベルギー人の宣教師が自家製の飲み物を出してくれた。酢のように酸っぱくてちよっとびっくりしたが、それがワインだと初めて知った。帰途みん

ない気持ちになって流行歌などを合唱しながら帰った。桃源郷の話とは、このような光景だろうか。

九月、夜半、下の部落方向から五、六発撃ってきた。全員部署に就く。暗くて何も見えないが散発的に撃ってくる。大部隊ではないらしい。敵の上空に照明弾を打ち上げた。実に明るく、敵はあまりの明るさに動けない。照明弾が消えてもとの暗闇になったがもう撃つてこず退散した。

#### 河庄警備隊の救援

石油ランプの明かりで夜遅くまで麻雀をしていた。突然バンパンバン、ドカンドカンと音がする。外に出てその方向を見ると北方一〇キロの小高い丘の上の河庄分遣隊が敵の襲撃を受けている。暗闇の中、火花のような手榴弾の炸裂！ 敵味方撃ち合う小銃、軽機の発射火炎がよく見える。すぐ救援だ！ 中隊本部には十人ぐらい残して山崎隊長以下五十人が急行した。夜明け前に到着。敵は東の山の上逃げた。

敵は五百で山の上に。我が方は五十人が山の下で太陽に向かったの攻撃、地の利悪し、中腹まで追ったが

我が方少しと見て頑強に反撃してくる。撃ち合いとなり進むことができない。昼も過ぎたころには弾丸が、あと五、六発しか無いという。福島一等兵戦死。もう撃つてはならぬ。じっと我慢だ。日が暮れるまで死守せねばならない。

「敵もなかなかやるな」、山崎隊長が私に話しかけてきた。そのとき二人の間一メートル先の黄土が撥ね上がり、敵弾が突き刺さり、思わず首を引つ込めた。午後三時ごろだった。後の方で「大人、大人」と呼ぶ声がある。振り返って見ると、なんと大孟鎮の中国人青年たちではないか、敵弾がカンカンパンパンと黄土を跳ね上げる中を訓練された日本兵のごとく、伏せては走り、走っては伏せ弾薬箱を五箱、大孟鎮から十キロの山道を選んできてくれたのであった。どんなに嬉しかったことか！「謝々！」「御苦労」と心から中国青年たちに礼を言った。すぐ全員に弾を分けた。

十一年式軽機にも弾を一杯つめた。敵は我が方が撃たないので、もう弾がなくなると見てか、なめて逆襲して来た。左前方五〇〇メートル、青い軍服の八路

兵五十が散開して走りながら山の斜面を駆け降りてくる。山上よりの敵の援護射撃は一段と激しさを増してきた。三五〇メートル、三〇〇メートル、二五〇メートルと近づいてくる。山元曹長は初年兵の軽機射手に「わしに銃をよこせ！」と言って受け取るや前の台地に躍り出て銃を構えて伏せた。

「危ない！」曹長の全身は山上の敵から丸見えである。敵弾が何発も曹長のほんの近くの黄土を撥ね上げた。その時、山崎隊長の「撃て！」の号令、一斉射撃開始！ 距離二〇〇！ 曹長はもとは軽機の射手だった。沈着、正確に点射で敵に撃ち込んだ。全弾撃ち終わると転げ落ちるように、後ろに滑り下りた。

擲弾筒が二発、逆襲隊の鼻先で炸裂した。敵は慌てた。十数人の死体を残して逃げた。山上の敵本隊も、あきらめたか山の向こうに引き揚げていった。山元曹長の撃っていた軽機の床尾板は敵弾により「ザクロ」のように撃ち抜かれていた。たぶん、うしろに滑り下るときに撃ち抜かれたものと思われる。戦いは終わった。誰もが無言で座り込んでいた。急に腹ペコで力が

抜けてしまったのである。昨夜から何も食べていない。暗くなって山道を引き揚げた。

実に中国民衆の決死の救援により危機を脱したのである。人間の信頼関係は国や民族の違いを越えて実に実に大切なものであることを痛感させられたものであった。

#### 「米英に宣戦布告」中支戦線へ

昭和十六年十二月八日、日本は米英に対し宣戦布告した。大変なことになった。太原に集結命令が出て慌ただしく大孟鎮を後にした。三百人ぐらゐの中国人が見送りに来た。山崎隊が三年間、中国民心把握に努めてきた大孟鎮はその後どうなっているだろうか。

北支山西省から中支南京へ。鯖江連隊一番乗りの光華門横の高い城壁の一角は無惨に崩れ落ち、城壁の煉瓦は一面蜂の巣のごとく弾痕が当時の激戦の跡を留めていた。

数日後、揚子江を遡り武昌へ着く。殺風景な黄土の山西省から風光明媚な中支へ。十二月というのに早春のごとき陽光を浴びて、両岸の景色はパノラマのごと

く移り行き、帆を上げて行き交う小舟、魚をとる漁民の姿、水辺に遊ぶアヒルの群れ、日本に帰ったような安堵感さえ覚えた。

武昌は武漢三鎮の一つ、丘の上には武漢大学がそびえ建ち、澄み渡る大空のもと武昌人通りを乗馬で闊歩すればどこに戦いがあるかと思われた。

昭和十六年十二月二十八日、中支第十一軍司令官阿南中将の命令により第二次長沙作戦が開始された。十数倍の重慶軍の執拗なる包囲攻撃を受け、死闘中の第三、六、四十師団らの救援のため、我が独立混成第九旅団はこの作戦に急遽投入されることになった。

私は十数人の兵と共に留守を命ぜられ、山崎隊長以下懐かしい勇士達を武昌で見送った。この別れが一週間後の戦場で山崎隊玉砕になろうとは思わなかった。

一月九日「山崎隊全滅」の報を聞いてわが耳を疑った。大変なことになった。武昌から岳州行きの船に飛び乗った。岳州の野戦病院へ行くべく歩を進めた。後方では砲声が殷々と雷鳴のごとく轟き渡っている。道

中は負傷兵の行列が切れることなく続いている。重傷者を運ぶトラックの行列も昼夜を問わず途切れることはなかった。野外広場のアンペラの上には数百人の負傷者が横たわり、応急手当の後、船と飛行機で漢口、武昌に後退した。

瘦せこけて鬚だらけ、垢で真っ黒の負傷兵が行列をなして治療の順番を待っている。毎日何千人か分らない。とても家族の者には見せられない光景だ。その中を山崎隊の生き残りを探して回ったが一人も見付けられないことができなかった。

一週間ほどしてようやく島田兵長を見付けた。顔も手もサツマイモの油で真っ黒。瘦せこけて丸腰、軍服も脱ぎ捨てて民家から盗んだ支那服を着ていた。泣きながらぼつぼつと戦況を話した。差し出したようかんを餓鬼のように一度に五、六本も平らげた。

戦後四十年を過ぎて影珠山生き残りの一人島田君の手記を戴いた。

影珠山決死隊生き残りとして

昭和十七年一月八日、敵の大部隊に包囲されながら

撤退してくる友軍を救うため、影珠山の敵司令部を襲撃することになり、その白羽の矢が我が山崎隊に立ったのである。詳しいことは兵隊には分からないが敵正規軍の精銳部隊が相当数いるらしい。中隊長や小隊長の顔を見ただけでこれは大変なことだと分かった。

隊長は白たすき、兵は白鉢巻、決死隊のいでたちだ。弾は一二〇発、手榴弾二発のうち一発は自決用だと言いつつ渡されたとき、体が震えた。(中略)

激戦の末、敵司令部の影珠山を占領した。夜明けと共に敵の反撃は熾烈を極めた。迫撃砲弾がヒュルヒュルと不気味な唸り音をたてて近付くと大爆音をたてて炸裂する。とても生きた心地がしない。午前十時ごろにはわが弾薬は尽き果て戦いは全く一方的になってしまった。あちこちで手榴弾が炸裂して「ウーン」と呻く声が聞こえる。負傷した戦友が自爆するのだが助けに行くこともできない。

あたりを見回しても生きている者はいない。とうとう俺一人になったのかと思った。何としても生き延びたい。敵が蟻の這い登るように登ってくるが弾がない

のでどうすることもできない。手榴弾を二発取り出して安全栓を抜いて発火するや続けざまに敵に投げつけた。大爆音を立てて炸裂した。敵のひるむ一瞬のすきに飛び出した。道なき山の斜面を駆け下りた。木の根につまづき転んでは起き、走っては転び駆け下りた。

いつの間にか三八式歩兵銃も手離していた。草蔭に隠れ暗くなるのを待った。喉は渇くし腹はへる。そのうち一軒家を見付けて、そっと中に入りこんだ。良民らしい二人が住んでいて水を飲ませてくれ粟飯も食わしてくれた。

しかしいつの間にか二人の姿は消えた、さては知らせに行つたなと思ひ飛び出した。軍服を着ていては危ないと思ひ脱ぎ捨てた。

昼間は隠れていて、夜、北極星を頼りに北へ北へと歩いた。何日かして大勢の声のする方にしのび寄つたところ、それが友軍だと分かつた時の感激は今でも忘れられない。「助かった」と叫んだら一度に力が抜けてくたくと倒れこんでしまった。何日だったか、どこだったか全く覚えていない。いつの間にか寝てしまっ

た。その後、大きな河を渡った記憶がないから、泪水は第六師団の車に收容され寝たまま渡ったのかも知れない。

岳州に着いて中隊長以下全員戦死されたと聞いて茫然とした。あの時自爆すべきだったかと自問自答したが俺にはできなかったのだと自分に言い聞かせた。自分のように死に切れなかった者が、あとで何人か帰って来た。「戦死した戦友に申し訳ないが、お互い命があつて良かった」と抱き合つた。数日して軍法会議にかけると言われて事の重大さに改めて驚愕した。「菊の紋章の入った二八式歩兵銃を捨ててきた」というのが理由であつた。

影珠山に置き去りにしてきた山崎隊長はじめすべての戦友の遺体。せめて指一本でも持ち帰るのが戦場の習わしであるのに何一つできず、みんなうっちゃってきたのだ。大隊砲、重機、軽機、擲弾筒、小銃、夥しい武器全部置いて来たのである。軍法会議にはかけられなかったが、影珠山の死闘は、その後の私の人生に暗い蔭を今でも落としている。「陰珠山の生き残り」

と言いはやされても、山に残してきた戦友のことを思えばいい気持ちはしない。新聞では「天皇陛下万歳」と叫んで全員玉砕したと伝えられたが、そんなことを唱えて死んだ者は一人もいない。

やっぱり俺は生き延びて良かったと、何べんも何べんも自分に言い聞かせて今日に至っている。

## 広水の教育隊から応山の警備隊へ

愛知県 朝倉 博

私は昭和十八年四月の徴兵検査で甲種合格となり、歩兵十八番と書いた紙の札をもらいました。入隊は八カ月後の十二月二十日です。入隊先は新潟県の新発田市東部第二十三部隊（第四十二師団歩兵第一五八連隊第三中隊）でした。当時私は新潟県直江津の住友系の日本ステンレスの鋼材機械加工係として勤めていました。

私の家庭は複雑で、生母は離婚して私が長男、下に